

マレビトスタディーズ

「ヒロシマ/フクシマ」をめぐる語りあうまえに

松田正隆

ここ数ヶ月の、私や私のまわりのことから書き始めてみようと思います。3月11日に大きな地震があって、フクシマのことがあって、取り返しのつかない現在進行形の事態の推移のなかで考えていたことです。

あれからずいぶん時間がたったような気がするし、報道で知らされた事実を忘れられるほどの時間がたったとも思えません。ただ、なにか、あのころよりは「うすくなった感じ」がしています。おそらくはこのような時間の感覚は、あの事態からの私の距離のあらわれなのかもしれません。この半年の時の流れをどのようにとらえればいいのか。歴史の起点になるような大きな出来事の度に、その後の数十日をどのように言い表せばいいのかと、求められもしないのに、なにかからの要請があるかのように、人々は考えたがるのかもしれませんが。私も同じことをしています。

だけれど、震災のことについて、フクシマのことについて、考えてはいましたが、積極的に書いたり発言する気にはなりません。私たちに「なにができるのか」という言葉が世間であふれていたとき、その問いの発信の場と宛先のわからなさとそのキャッチフレーズの強さばかりが目につくようになり、戸惑いを隠せませんでした。「なにか、私にでもできることがあるはずだ」という「できること」探しの流行はなぜおこったのでしょうか。そして、それは「復興」という未来への言葉とともにあり、あげくのはてに「がんばれ、ニッポン」というみもふたもない言葉が真剣にこの国の都市や地方のあちらこちらに貼付けてあるということになったのでした。

演劇をする人たちからもいくつかの発言がありました。その多くが震災の被害者を思う言葉で言い表されていました。このような出来事が起こったときにこそ演劇をする意義があるのだ、というなぜかその当時は非常に説得力のある言説が多く聞こえて来ました。あるいは、今度上演する作品は、ある意味でこの震災とフクシマの事態のことと関わりがある。その多くの死者の追悼の意味もある、などなど。

なにか、とってつけられたように3・11以後のことが演劇をする人たちの自作やその周辺に結びつけられることに私は違和感を覚えたのでした。

私は発言の機会がまったくなかったわけではありませんでした。そのときかろうじて述べたことは国民化のことと記憶のことでした。「絆」という声や文字が矢鱈に横行してしまし、被災者の体験は受難劇として消費され、国民の記憶としてどこかに貯蔵されるのではないかと

いう危惧がありました。

しかし、そのような危惧をうまく言葉にして書いたり発話することができないでいました。ましてや、その危惧から先の語り出しもできないままでした。

ただ、先日 8 月 9 日にまったく人気のない飯舘村を車で走っているとき、二つのことを考えました。

一つは日本のふるさとをこれほどまでに想起させるような自然のある場所に人間が住めなくなるということはどういうことか、ということです。

もう一つは、うまく説明できないのですが、避難地域（飯舘村や広野町など 20 キロ圏内付近の地域）において人を住めなくするものが「ここ」ではなく「どこか」にあり、今や、その「どこか」のものが「ここ」を汚染している、ということです。「ここ」と「どこか」のあいだの距離が無効になるようなことが起こったのだという実感です。いや、確かな実感などはないのですが、現実として受け止めざるをえなかったと言えはいいのでしょうか。それは、目に見えない気配に怯えるという意味でもそれに取り憑かれ死に至るかもしれないということでも亡霊の恐ろしさに近いように思われたのでした。もちろん、私は亡霊を見たことはありませんが。

「ここ」に「どこか」からの到来があり「ここ」を「どこか」からのなにかに開け渡すことはできるのか、ということが、今、避難地域では進行しており、「どこか」との関わりを私たち人間は問われているのではないのでしょうか。

いわき市のある映画館の前を通ったとき、上映作品のポスターと一緒に入り口付近と館内の今日の放射線量を書いた看板が立っていました。避難地域でなくとも、フクシマでは「どこか」との関わりを示す数値に人々は慣れてゆくしかないようなのでした。

「ヒロシマ/フクシマ」という題名にしたのは、ヒロシマの思想がどのようにフクシマにつながるのかを提起したいと思ったからでした。かの地の、現在の深刻な事態をフクシマとカタカナ表記し、ヒロシマと結びつけようと企てることに躊躇はありましたが、そのことの語りの場にヒロシマという位相を置くことで聞こえて来る過去の声や見えて来る視点もあるのでないかと思いました。

この、マレビトスタディーズという集いで、これまでに考えていたことを言葉にして語りあい、これからの言葉を紡ぎあげるためにも、今、いちばんその発言に耳を傾けたい人たちに集まってもらいました。

広島でこのような発話の機会を得ることになり、ほんとうによかったと感じています。